

# むきばんだ花だより

10月

2016.10.1

「古代人もかぐやの葉を拾ひけり」  
もと



## ◎フユノハナワラビ(冬の花蕨)ハナヤスリ科、ハナワラビ属

別名 カンワラビ「寒蕨」フユワラビ、ハナワラビ

日当たりのよい山地林縁、原野や路傍の草地に生える多年生草。ゼンマイやワラビと同じシダの仲間ですが、本種は光合成を行うための栄養葉と、胞子を付けて散布するための胞子葉の2種類の葉があります。冬頃に、直立した胞子葉を伸ばしあかかも花が穂状に咲いたように見えるので「冬の花蕨」と呼ばれます。また、冬に向け出現するので「寒蕨(カンワラビ)」の別名もあります。ちなみに夏に胞子葉が出る「ナツノハナワラビ」もあります。これもシダ植物です。◎ 食べられるそうです。若葉、若芽、胞子葉の葉柄部分を茹でて食べますが、群生している所がめったになく食用にするほど集めるのは難しいようです。○ 生薬で、陰地蕨(いんちけつ)と呼ばれ全草を干した物を煎じて腹痛や下痢の薬にするそうです。

○花言葉：再出発 俳句では冬の季語

★撮影日：2016,10,1 ★撮影場所：むきばんだ公園入口



クサギ

## ◎ヤマハギ(山萩) マメ科、ハギ属、ヤマハギ亜属

各地の山野に広く分布して生える落葉性低木。葉は3出複葉で秋に紅紫色の花を付ける。○名前の由来：毎年根本から新しい枝を伸ばすことから、生え芽(キ)と云われるようになり、転じて「ハギ」になったと云われます。昔はハギを芽子と書き、また、芳宜草とも鹿鳴草とも書かれていました。漢字の萩は当て字で秋の代表的な草花として位置付けられていたことから、(秋に花を咲かせるので、草冠りに秋と書いてハギと読ませました。)日本でつくられた漢字です。

○花言葉：思案、思い、内気、柔軟な精神

◎ハギは「秋の七草」のトップにあげられ、万葉集の中で最も多く詠まれた植物です。「萩」の字は万葉集の時代にはなく、平安時代になってから登場します

★撮影日：2016,10,1 ★撮影場所：むきばんだ公園入口

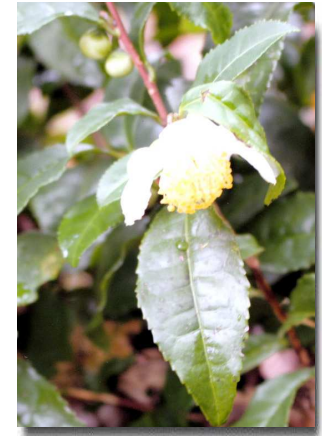


## ◎チャノキ(茶の木) ツバキ科、ツバキ属 常緑樹

原産地はインド・ベトナム・中国西南部とされていますが詳細は不明、野生化した樹木を含め熱帯からアジアに広く分布。

花は10～12月初旬頃に咲く。そのため「茶の花」は日本においては初冬(立冬[11月8日頃]から大雪の前日[12月7日])の季語とされています。○花は枝の途中の葉柄基部から、短い枝にぶら下がる形で下向きに咲き、花冠は白く、ツバキの花に似るが花弁が抱え込むように丸っこく開く。日本では、栽培以外に山林でよく見かけますが、古くから栽培されているため逸出している例が多いようです。名前の由来：中国語(広東語)の茶を音読みしたもので、中国から陸路で、チャ、チャイ、チャーヤ、海路でデー、ティーと呼ばれて、世界中に知られました。○花言葉：純愛、追憶

★撮影日：2016,10,1 ★撮影場所：妻木新山地区



## ◎ツワブキ(石蓼・艶蓼) キク科、ツワブキ属

別名：ツヤブキ、イシブキ、ツワ、オカバス、多年草

海がごく近い海岸線に多く自生します。日本以外では台湾にも自生が見られます。○名前の由来：艶蓼(ツヤブキ)、艶のある葉のフキからの説。また、厚みのある葉っぱから(厚い葉のフキ→アツブキ)に由来するとの説もあります。○日陰でもよく育ち冬でも濃緑色の葉は枯れず、秋から冬に地際から長い花茎を伸ばして、キクに似た一重の黄色の花をまとめて咲かせるので、古くから庭園の下草などに植えられています。葉の形や葉表に色々な模様のはいるものがあります。～キンモン(金紋)、キンカン(金環)、シシバ(獅子葉)チリメン(縮緬)、シロフクリン(白覆輪)～など、花の変異として八重咲きもあります。◎津和野(島根県)は「ツワの多く生える場所」が語源となっている、と云うエピソードがあります。

○花言葉：困難に負けない・愛よ甦れ・謙譲・困難に傷つけられない

★撮影日：2016,10,1 ★撮影場所：むきばんだ公園入口

## ◎ナツハゼ(夏櫃) ツツジ科、スノキ属 落葉低木

5月頃、スズランに似た赤みをおびた釣鐘状の花が咲き、秋には黒紫色に熟す。ジャムや果実酒などにして楽しむことができます。名前の由来：、夏にハゼ(落葉高木)の様に葉が赤くなることがこの名の由来です。○長野県北部の〇V農園では20年以上前からナツハゼを栽培しジャム製造会社などに販売しているそうです。当地では実が「ぶんぶくちやがま」に似ていることから、「ぶんぶく」と呼ばれ「ぶんぶくベリー」「黒い真珠」などと呼ばれているそうです。作られている場所の標高は高め(600m)の様です。

○花言葉：飾らぬ美

★撮影日：2016,10,1 ★撮影場所：妻木新山地区



★ネズミモチ(鼠糞)

モクセイ科、イボタノキ属について

別名：タマツバキ・カワツバキ(鳥取西部と島根東部の一部で、よばれているようです。)

○暖地の海岸近くに自生する常緑低木。庭木や街路樹として植えられ葉はモチノキに、熟した果実はネズミの糞に似ているので、この名前が付いたようです。果実酒を作り、強壮・強精などにもちいます。果実は女貞子(じょていし)と呼び薬用に用いられます。材は太鼓のバチによく使われた。… ○来園された、安来のお客様から「ばんだには、カワツバキの木はありますか」と質問があったため。参考まで



◎ニガキ(苦木)ニガキ科、ニガキ属、雌雄異株、

落葉高木で、東アジアの温帯から熱帯に分布する。

別名：クジュ(苦樹) 名前由来：樹木のすべての部分に強い苦味があるので名前由来となっている。樹高は12m以上になるものもある。葉は互生し、奇数羽状、花期は4~5月。集散花序の小さい黄緑色の花を多数つける。♂花序には30~50個、♀花序には7~10数個の花が付く。果実は2~3個の分果となり緑黒色に熟す。樹皮は滑らかで暗褐色 樹皮を乾燥させたものが生薬の苦木(にがき、くぼく)で、薬用「苦味健胃剤」の他、殺虫剤の材料として用いられる ○乾燥木材を削ったもの。葉を乾燥させたもの等を煮出して煎剤をつくる。これを殺虫剤として農作物や家畜へ散布して使用する。効果は農薬より劣るが、天然の殺虫剤として有機農法などに使用される。○西インド諸島ノジャマイカでは、ニガキで作った水飲みコップが土産物として売られているそうです。これを使用して水を飲むだけで、胃が丈夫になると言われています。

★撮影月日：2016,10,1 ★撮影場所：妻木山地区

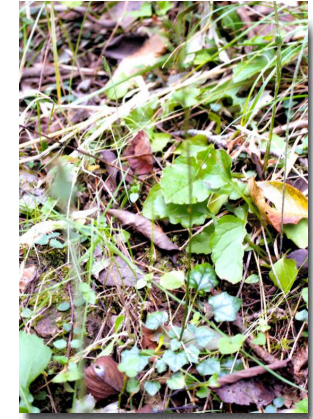


◎キッコウハグマ(亀甲白熊) キク科、キク亜科、

モミジハグマ属。多年草、低山の森林内やや乾いた木陰に生育する。一面にコケの生えたような場所に多く、沈むように生えているのを見かける。小柄なので、花が咲いた時だけ良く目立つ。地下茎は細長く横に這う。茎は直立し高さ10~30cm位、葉は茎の下部にやや輪生状に5~11枚つき腎形または卵形で五角形になり、5裂して葉の表面には毛が生えている。花期は10月。頭花は3個の小花が集まってできている。花冠は白色、先が5つに深く裂ける。一つの花には花弁が5枚と蕊がある、蕊は1本に見えるが細い糸状の雄蕊が雌蕊を囲んでいる。小花は閉塞花を結ぶことが多い。

名前の由来：葉が五角形で亀の甲羅に似ていて、花が高僧の持つ仏子(ぼっす)に似ていることからついた。なお、仏子のことを白熊(はぐま)と云います。花言葉：素朴、清楚

★撮影日：2016,10,1 撮影場所：むきばんだ公園入口



2007年11月4日 玉湯

★ハグマ「白熊」の由来について

ハグマ「白熊」とは中国産の「ヤク」と云う動物の白い尾。毛を染めて、武将の采配、僧侶の仏子(ぼっす)、旗や槍の装飾として使われました。キク科の植物の中で、このハグマの形をした花に「ハグマ」の名が突いているそうです。



★むきばんだを歩く会★

- 指導：鷲見寛幸先生(鳥取県自然観察指導員)
- 毎月第1土曜日午前9時30分~正午
- 入会金 2000円 毎回資料代 300円 いつでも、どなたでも入会可能です
- 問い合わせ：むきばんだ応援団「むきばんだをあるく会」